

室内装飾の変遷と旧渡辺甚吉邸

—女性雑誌と三越家具部を中心として—

目次

序章
はじめに 研究動機 研究目的 研究方法 既往研究
第1章 室内装飾のはじまり
第1節 上流での意識 <ol style="list-style-type: none">「室内の飾り方」（『女学雑誌』） 「家政小話（其二）室内装飾」（『婦人教會雑誌』） 「室内装飾法」（『処女のつとめ』）
第2節 中流への広がり <ol style="list-style-type: none">「室内装飾法」（『家庭顧問』） 「室内装飾のこと」（『母のため』） 「日本室内装飾法」（『家政宝典』）
第2章 女性雑誌の室内装飾
第1節 生活改善運動
第2節 女性雑誌の室内装飾 <ol style="list-style-type: none">主婦の友 婦女界 婦人之友
第3節 昭和初期の女性雑誌における室内装飾
第3章 百貨店と室内装飾
第1節 様々な百貨店 <ol style="list-style-type: none">百貨店の変遷 呉服屋系百貨店
第2節 百貨店の家具装飾部 <ol style="list-style-type: none">三越 高島屋 百貨店の室内装飾展覧会 家具商の存在
第3節 昭和初期の三越の室内装飾 <ol style="list-style-type: none">室内装飾展覧会 三越家具部の設計力 製作の技術力
第4章 旧渡辺甚吉邸について
第1節 基礎情報 <ol style="list-style-type: none">平面構成 構造形式 施工業者
第2節 主な施工業者と製品 <ol style="list-style-type: none">赤山商會 泰山製陶所 矢橋大理石店 三越家具部 市川商會
第3節 旧渡辺甚吉邸の生産体制の特徴 ロールスクリーン 最新設備の台所
終章
結論 考察 謝辞 参考文献

2017年度 建築史研究室

修士論文発表 2月1日（木）

中谷礼仁研究室 住宅の建て方勉強会

修士2年 政本悠紀

序章

研究目的

明治時代の西洋風建築の流入から西洋文化全般と共に大衆に広まる、日本の近代化のなかの一つの新しい概念であるといえる「室内装飾」（インテリア）。住宅においてそれは趣味の領域であり、建築家や大工だけでなく家主によって設える事が出来るため、その人の性格が表れる点においては現代と同様である。延いては、社会におけるその概念の変遷は社会思想と相互に関係を持つといえる。

概念の変遷、主に大正期から昭和初期までの室内装飾に関する思想、生産体制を把握する。
その中で旧渡辺甚吉邸がどのように位置づけられるかについて考察を行う。

研究方法

◆室内装飾概念変遷

「生活改善」「女性雑誌」・「百貨店」「家具」の4つに着眼し住宅の室内装飾の概念を追う際に「思想」「生産」という二つの構造からその像を捉える事が出来る。大正期～昭和初期までの概要を捉える。

◆旧渡辺甚吉邸考察

基礎情報の調査を行うにあたり、『建築土木資料集覧』や社史を用いて各施工業者の変遷を把握する。その上で室内関係業者を挙げ、上記時代背景と対比させて考察を行う。

図1 本研究の位置づけ（筆者作成）

既往研究

◆室内装飾

・**神野由紀**. (1999年). 「百貨店と室内装飾」.『百貨店の文化史』

・**初田亨**. (1993年9月). 「明治・大正期における三越の家具と室内装飾」. 日本建築学会大会 .

・**新井隆治**. (2017年2月). 『戦前日本の家具・インテリア 『近代家具装飾資料』でよみがえる帝都の生活』. 東京：柏書房 .

・待鳥邦会, 横川公子.(2012年)「室内装飾における西洋風を受容と葛藤」. 武庫川女子大学・生活環境学部・生活環境学科 .

◆女性雑誌

『主婦の友』

・尾川幸奈.(2007年). 「大正期～昭和前半期の『主婦の友』における住宅関連記事について」. 日本建築学会 .

『婦人之友』

・久保加津代.(1995年). 「都市「中流住宅」における生活者の住居観と住生活改善:大正期を中心とするデモクラシー期の「婦人之友」誌の分析を通して」. 奈良女子大学 .

第1章 室内装飾のはじまり

室内装飾の言説の初めは明治23（1890）年頃であることが分かった。初期の頃は室内装飾の概念が上流階級の洋風住宅に関する言説であった。明治36（1903）年出版の『家庭顧問』において、福田滋次郎は「奢侈に涉べからず」という言説が最近増えてきたと述べ、続けて「装飾法といふからには、多少奢侈の意味を含んでゐる」と述べている。⁽¹⁾このことから、この時期に豪華絢爛のイメージがあった室内装飾から、少しずつ庶民的な家庭に対してもその概念が受容される基盤が生成されていることがわかる。中には掛け軸や茶器の配置配色といった和風住宅の装飾に関する記事も見られ、室内装飾はもはや洋風住宅にのみあてはめられる概念ではなく、和洋の隔たりを超え、遍く広まっていくことが確認できた。

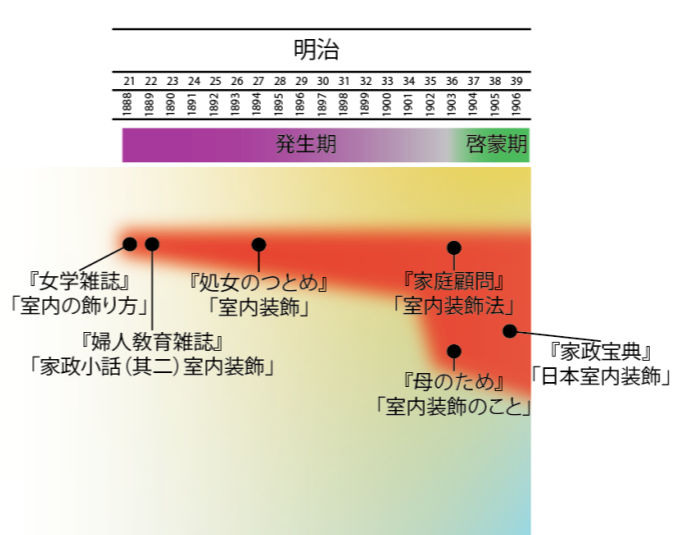


図2 室内装飾の起こり（筆者作成）

第2章 女性雑誌の室内装飾

第1節 生活改善運動

明治42（1909）年6月7日付の『東京朝日新聞』の記事にて初めて日本に登場した「生活改善」は大正期に入り、官民の隔たり無く生活の合理化を主軸として様々な取組みが行われた。住宅に関しては起居様式の批判や、安らぎの場としての住宅の在り方や、平面の合理的計画などに関する言及がなされた。官の取り組みとしての「生活改善同盟会」や同盟会が開催した「生活改善展覧会」に室内装飾に関する言説は登場しなかった。むしろ簡素な形状や合理的な「改良〇〇」といったものが多く見受けられた。（例：改良住宅、改良臺所、改良チャブ臺）

第2節 女性雑誌の室内装飾

既往研究より、女性雑誌の中で昭和初期における出版数⁽²⁾の多さと、住宅記事の多さから以下の3つの雑誌を選定した。『**主婦の友**』大正6年創刊　昭和2年時発行部数：約**20万**
『**婦女界**』明治43年創刊　昭和2年時発行部数：約**16万**
『**婦人之友**』明治41年創刊　昭和2年時発行部数：約**6万**
これらの雑誌目録の中から大正昭和期を中心に室内装飾に関連する記事を抽出しその傾向を捉えることを試みた。

第3節 昭和初期の女性雑誌における室内装飾

	主婦の友	婦女界	婦人之友
明治43	1910	3 4 7	11 12
：			
大正2	1913	(大正6年創刊)	1
大正3	1914		5
：			
大正10	1921	8 10 12	4 5 11
大正11	1922	2	
大正12	1923		4
大正13	1924	1 4	6
大正14	1925	7	
大正15	1926	6	
昭和2	1927		9
昭和3	1928		11
昭和4	1929	6	
昭和5	1930	7	
昭和6	1931	1 4	
昭和7	1932	7	
昭和8	1933	7 12	
昭和9	1934		
昭和10	1935	6	9
昭和11	1936		
昭和12	1937		
昭和13	1938		5

図3 3女性雑誌内での「室内装飾」に関する記事（数字は出版月）（筆者作成）

3雑誌の室内装飾記事は共通して主婦の手によって扱える範囲である手芸の延長として装飾の範疇だった。また口絵の室内装飾の様子や、記事の内容からそれぞれの記事が対象としていた読者層から大まかに3段階に分けられることが分かった。『『婦人之友』は上・中流の家庭向け』⁽³⁾『『主婦の友』は女工や女中といったプロレタリア層にもっとも読まれている』⁽⁴⁾といった既往における客観的評価と照合した。

中流一上 『婦人之友』 家具窓掛による「調和」や図柄製作

中流一中 『婦女界』 浴衣地を用いた自作の室内装飾

中流一下 『主婦の友』 帯や木綿地の代替品で装飾

小結

女性雑誌による室内装飾に関する記事の変遷として全体を通して昭和初期に入る頃から煌びやかな装飾というよりはあくまでも手芸であることを再認識したかのような簡素な内容のものが見られるようになった。時代の流れと共にその記事が見られなくなることから、大衆の目はむしろ生活の中での実用性や、工夫といった合理的な生活の質の向上に目が向くようになることがうかがえる。既往研究の女性雑誌における住宅記事の傾向においてもそれが認められている。

大正期初頭に起こる生活改善気運の高まりと照らし合わせると室内装飾記事の集まる大正後期～昭和初期にかけてを室内装飾の興隆期と考える事が出来る。よって以下のように時代区分を仮定した。

【啓蒙期】 明治後期～大正初期（前章から啓蒙的性格が続く）

【中斷期】 大正初期～大正後期（生活改善思想が台頭する）

【興隆期】 大正後期～昭和初期（実践的記事が多く興隆する）

【縮小期】 昭和初期～ 戦前期（工夫や実用への言及が増加）

第3章 百貨店と室内装飾

第1節 様々な百貨店

百貨店の出自は主に呉服店と、昭和期に入ってからの電鉄会社を母体とする2者が存在する。本論では前者の呉服系百貨店を主に扱い、その変遷と室内装飾への関わりについて言及した。百貨店の形態は欧米諸国のDepartment Storeを模倣し成立されたものだが、日本の百貨店は海外のそれとは異なり、家庭を意識した事業展開を行ってた。

家族で訪れる娯楽の場としての役割を果たしていた日本の百貨店が、欧米の百貨店を模倣してつくられたものではなく、日本でそのように意図してつくられていったものである^{（5）}

欧米の百貨店でも事業として展開していた室内装飾と相俟って日本特有の室内装飾事業が展開されることとなる。

第2節 百貨店の家具装飾部

三越と高島屋は大手百貨店の中でも室内装飾事業に早くから手を付けていた。高島屋の室内装飾部の始まりとなるのが、明治11（1878）年の段通店（絨毯）の開業である。三越は林幸平による明治41（1908）年の在仏日本大使館での室内装飾設計がその嚆矢である。これら2社はその生産体制を整えながら昭和3（1928）年開催の仏蘭西装飾美術家協会展覧会の影響を受けて、昭和7（1932）年頃から総合的なコーディネートを意識した「室内装飾展」を開始することとなる。これに伴った他の百貨店も室内装飾への参入により、百貨店界において室内装飾が最も興隆した時期であることが指摘されている^{（6）}。

第3節 昭和初期の三越の室内装飾

前節において仏蘭西装飾美術家協会展覧会の影響を挙げたが、この展覧会はフランスの室内装飾一式を輸入し組み立てられたものであるが、この施工を請け負ったのは三越であることが分かっており、会の終了後には一式を三越が買い取り研究したという。その外にも、西洋の様式に博識な設計者、田中邦次郎が三越家具部主任を務めていたことが分かっている^{（7）}。このことから昭和初期三越家具部は高度の室内装飾設計施工技術を有していたことが伺える。

小結

百貨店の中でも一つ頭が抜ける三越に着目しその室内装飾への関わり方を追ってきた。日比翁助による先見の明から室内装飾事業に乗り出し、時には生活改善運動気運に同調し、昭和期には最高峰の設計施工生産体制を有していたことが分かった。

第4章 旧渡辺甚吉邸について

前節までの室内装飾の変遷史上において昭和9（1934）年に建てられた甚吉邸は、生産として百貨店が高い設計施工力を持ち、かつ戦前期の国民精神総動員による奢侈規制思想に入る前の最後期に位置するといえる。

史料調査によりその施工業者には三越家具部が関わっていることが分かった。次に施工者一覧を紹介し、特筆すべき点を挙げる。

工事工程	起工	昭和八年 六月十三日	
竣工	昭和九年十二月十二日		
設計	エンド建築工務所設計部		
監督	同所工事部		
	藤田哲夫		
	小泉英祐		
	村山三郎		
附帯工事	電燈電熱配線工事	東電電気商品株式会社	
施工者	電燈器具製作	金丸製作所	
	同	明光社	
	衛星暖房工事	原田商店	
	家具装飾	三越家具店	
	ロールスクリーン	市川商會	
	敷物	赤山商會	
	陶工	泰山製陶所	
	大理石	矢橋大理石店	
	塗料	日本ペイント株式会社	
	臺所設備	浅野物産株式会社臺所部	
	食器（陶器）	大倉陶園	
	同（銀器）	關刃物株式会社	
	庭園	後藤健一造園事務所	
	消火設備	中央理化工業株式会社	

図4 工事関係者

『渡辺甚吉邸竣工記念誌』（工学院大学「今和次郎コレクション」）より引用

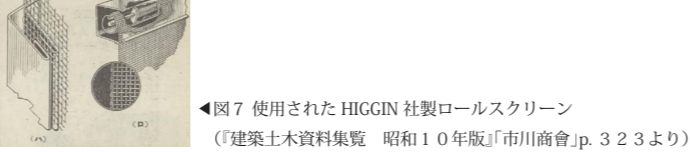
住宅構成要素の内、合理的や実用的に關した要素は昭和初期住宅の特徴であり、中でも甚吉邸において特筆すべき点は「**ロールスクリーン**」と「**台所**」である。前者は凡ての窓に取り付けられていることから設計者、家主の生活の質向上へのこだわりがうかがえる。しかし高級品であり上流住宅だからこそできたものである。

ロールスクリーンを取り付けたお家を、見たことがございませうが…略…あれは體裁がよろしうございますね。晝間は上へ巻き上げておくこともできて便利ですが、一枚十五圓くらゐしますから、中産階級には向きませんでせう。^{（8）}

後者、台所に関しては野村氏の論文^{（9）}を参照されたい。



▲図6 甚吉邸に用いられるロールスクリーン



▲図7 使用された HIGGIN 社製ロールスクリーン（『建築土木資料集覧 昭和10年版』市川商會.jp.323より）

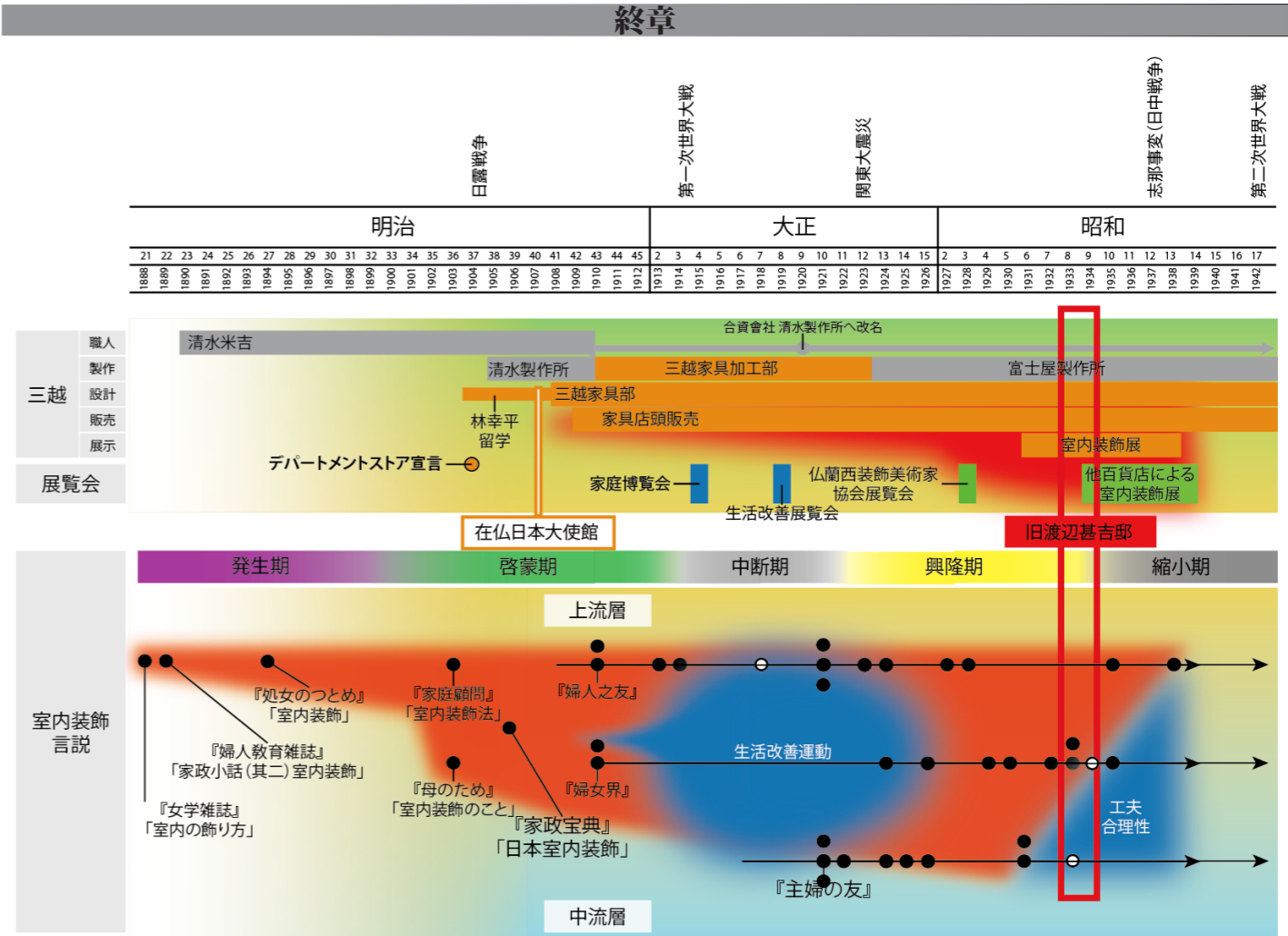


図8 女性誌と三越を中心とした室内装飾史（筆者作成）

結論

大正期から昭和初期の住宅に関する意識の中には、室内装飾概念の縮小と、合理化や実用性の併存する状態だった。中流以下の階級から徐々に贅沢の一環でもある室内装飾の概念が消え、戦前期には上流階級も室内装飾を避ける。一方、百貨店の室内装飾は、昭和期に入ると今まで培った家具の国内生産力に加え、室内装飾展をはじめ全体性を伴ったトータルコーディネートに邁進する。特筆すべき存在として三越が挙げられる。フランス美術展での施工一式請負や、家具部主任の博識さからも、主に上流階級を対象として、三越家具部は当時の室内装飾の生産組織としてはトップを走っていた。甚吉邸は必然的だが、合理的実用的の象徴としてロールスクリーン、最新設備の台所が導入される。最高峰の室内装飾を有する**旧渡辺甚吉邸の内部構成は昭和初期における極めて高いレベルの生産組織による集大成である。**

以下にその要点をまとめる。

・**戦争が近づくにつれ室内装飾が避けられる中、最後期の装飾を施した上流住宅である点。**

・**様式への理解と経験が豊富な三越家具部と今和次郎による設計施工である点。**

・**実用性合理性に配慮した当時最先端の設備（ロールスクリーン、台所）を有している点。**

参考文献/出典

【註脚】
（1）福田滋次郎（1903年）『家庭顧問』東京：晴光館。（2）近代女性文化史研究会（1996年）『大正期の女性雑誌』東京：大空社。（p.4）（3）尾川幸奈（2007年）『大正期～昭和前半期の「主婦の友」における住宅関連記事について―専門誌における住宅関連記事に関する建築史的検討―』日本建築学会東北支部。（4）新堀（2）(p.8）（5）初田亨（1999年）『百貨店の誕生』東京：筑摩書房（p.148）。（6）新井隆治（2017年）『戦前日本の家具・インテリア』『近代家具装飾誌』でよみがえる帝の生活』東京：柏書房。（p.61）（7）新堀（6）(p.80）（8）主婦の友社。（1933年7月号）『主婦の友』p.329.『夏の蟲を防ぐ工夫のいろいろ』小説家河間一氏夫人 中河幹子（9）野村渉（2018年）『近代日本建築との相克。旧渡辺甚吉邸に見るプラグマティズム』。2017年疫 早稲田大学建築系 修士論文。
【参考文献】
LIXIL（2017年12月24日）『LIXIL INAX ライノミュージアム』。参照先: http://www.lixil.co.jp/museum/current/030_history/000304.html 磯田善（2014）『植民地「台湾」言語をめぐる日本女子と家族：明治期の女性向けメディア『女学雑誌』『婦人顧問』を分析対象として』。奈良：奈良女子大学社会学研究会、池野剛史。（2016年11月）『菊地寛と『婦人雑誌』』東京：日本古書通信社。株式会社三越（平成2（1990年））『株式会社三越 85年の記録』株式会社三越。株式会社東武高島屋（2017年12月24日）『株式会社東武高島屋HP』。参照先: https://www.wakko.co.jp/ 株式会社高島屋工務所。（1989）『従道地地の理想―高島屋工務所50年史―』東京：株式会社高島屋工務所。久保加津代。（1995）『都市「中流住宅」における生活者の住居観と住生活改善：大正期を中心とする子モクレーン期』『婦人雑誌』の分析を通じて』奈良：奈良女子大学。近代女性文化史研究会（1996）『大正期の女性雑誌』東京：大空社。近藤正一（1906）『日本室内装飾』。著：家政実用（ページ：p.83）東京：東洋社。近藤正一（1922）『現代趣味の室内装飾』。東京：實業之日本社。建築工藝協會（1913）『三井男爵邸書院と書庫』。建築工藝雑誌。p.8。建築土木資料集覧刊行会。（1929年-1941年）『建築土木資料集覧』。工学会（1927）『明治工業史 建築編（上）』東京：工学会明治工業史発行所。林鶴庵寿（1921）『社会教育の史的的研究』東京：博道館。高橋義雄（1933）『静のあと（上）』東京：秋富園。高橋平三郎。（1903）『母のため』東京：元々堂。合資会社 エンド建築工務所。（1934）『渡辺邸竣工記念誌』。東京：風文堂。斎藤隆介。（1968年3月20日）『続・職人衆皆はなし』東京：文芸春秋。斎藤隆介。（1965年4月）『野口朝市・家具40年』東京：文藝春秋。三島浩子（1968）『近代婦人雑誌関係年表』。著：中野邦。『日本の婦人雑誌』東京：大空社。社団法人建築資料会。（1938）『建築土木資料集覧刊行会』。著：『日本建築資料発定』。社団法人建築資料会。主婦の友社。（1933年7月号）『主婦の友』。p.329。初田亨（1993）明治・大正期における三越の家具と室内装飾。日本建築学会。東京。初田亨（1993年9月）『明治・大正期における三越の家具と室内装飾』日本建築学会大会。東京：筑摩書房。初田亨（2002）『職人たちの西洋建築』大正出版株式会社。（1979）『新聞雑誌社特秘調査』東京：大正出版株式会社。中村圭介。（2000）『文明開化と明治の住まい―暮らしとインテリアの近代史（上）』東京：理工大学。渡辺保忠（1961）『工業化への道』東京：不二サッシ工業株式会社。（1979）『東京マツダシンパシク』藤森照信。（日付不明）『デザイナーとしての今和次郎』藤森照信。（1986）『建築探偵の冒険』東京：筑摩書房。内田青蔵。（1984）『住宅改良会』の取組について』日本建築学会。（1990）『日本カーベット工業組合（2017年12月24日）『日本カーベット工業組合』。参照先:『歴史・情報・観光』http://www.carpet.or.jp/public/index/48/ 日本住宅学会。（1999）『生活改良』。著：田中佐野子。『生活学事典』（ページ：p.539）東京：TBSブリタニカ。博覧会。東京：晴光館。（1995年5月）『近代住空間の形成―大塚・三越住宅建築部と岡田学建の活動―』日本建築学会。木橋翠（1934年11月号）『新設計室内装飾展観』を見る。『帝國工藝』。12。相田 健。（2016）『百貨運動における通俗教育の同時代的交響―生活改善運動と高島屋経済生活部の現観に関する考察―』千葉大学学術部。實業之日本社。（1926年6月）『小嶋より身を起こして三十五年間志動した 實業家の典型林幸平氏』。『實業之日本』。p.72-78。高島屋。（1941）『高島屋百年史』東京：高島屋。高島屋（1978）『高島屋家具・インテリア100年の歩み』。東京：高島屋。